〔島根県立大学短期大学部松江キャンパス研究紀要　Vol. 52　151 ～ 158（2014）〕

石見地域の幼児の言語についての調査（２）

山　下　由紀恵[1]　　高　橋　　純[2]
（[1]保育学科　[2]総合文化学科）

A Study on the Speech of Preschool Children in the Iwami-area of Shimane（2）

Yukie YAMASHITA, Jun TAKAHASHI

キーワード：就学前児，発話，地域差，方言
preschool children, speech, regional differences, dialect

１．はじめに

本報告では、「出雲方言と石見方言の境界域調査のための予備調査結果の分析とその方法の検討（１）」（高橋　山下，2013）および「出雲方言と石見方言の境界域調査のための予備調査結果の分析とその方法の検討（２）」（山下　高橋，2013）で示された方言使用の傾向について、島根県石見地方の就学前児で確認された事項についてまとめる。

「出雲方言と石見方言の境界域調査のための予備調査結果の分析とその方法の検討（１）」（高橋　山下，2013）では、島根県大田市周辺の出雲方言と石見方言の境界域調査の予備調査として、学生への方言使用に関する予備調査を行っている。有効回答141名のこの調査では、既存の研究や昔話の採話資料から選ばれた地域差を示す方言形式として、「理由を表す接続助詞の形式」の使用（問１）、「アスペクト形式で進行を表す共通語のテイルに相当するもの」の使用（問２）、「クレルに相当する出雲方言のゴス形式」の使用（問３）、「雨が降っている進行相を示す形式」の使用（問４）、「○○を履くことができないという可能の否定形形式」の使用（問５）、の５つの事項を調査しており、山陰地方の東から西に向かって、「鳥取西部・安来」「松江・出雲」「石見東部」「石見西部」の４地域の出身学生の言語使用状況の差異を検討している。その結果、問１から問５のすべての質問項目において、４地域の言語使用の地域差が示されていた。

また、「出雲方言と石見方言の境界域調査のための予備調査結果の分析とその方法の検討（２）」（山下　高橋，2013）では、子どもの言語発達に注目して、既存研究から、方言の出現しやすい年齢が就学前児と中学生以降であること、子どもの共通語使用は、ごっこ遊びでの「セリフ」、授業での「発表」など、話し言葉から書き言葉への移行場面で出現すること、を示した。

本報告では、2012（平成24）年度中に採集された島根県の大田市長久町、大田市温泉津町、江津市渡津町、の３箇所の保育所年長児の発話データから、上記の学生予備調査で示された地域差、また既存研究から示された話し言葉から書き言葉への移行について、予測どおり出現しているかどうかを、探索的に検討する。

２．方法

１）発話データの採集

調査方法は、「出雲方言と石見方言の境界域調査のための予備調査結果の分析とその方法の検討（１）」（高橋　山下，2013）に詳しく述べられているとおりであるが、全ての保育所において、同じ図版について、調査者（子どもにとっては見知らぬ成人）が同じ設定で説明叙述を求める形式ですすめられた。使用された図版は、「ことばのテストえほん」（日本文科学社，1997年）の一部と、２つの紙芝居、「チョコレートカステラだいじけん」（童心社）、「くわず女房」（童心社）、の一部であった。

２）対象児

今回の島根県内調査３箇所の対象児は、以下のとおりであった。各保育所に言語調査への協力を依頼し、４名程度のグループごとに調査者との間で会話を行い、発話データを録音録画で採集した。

（１）大田市長久町－私立保育所「サンチャイルド長久さわらび園」の年長児18名（男児８名、女児10名）。年齢最年少５歳９ヶ月、最年長６歳７ヶ月、平均６歳２ヶ月。平成24年12月７日採集。

（２）大田市温泉津町－市立保育所「温泉津保育所」の年長児11名（男児６名、女児５名）。年齢最年少５歳10ヶ月、最年長６歳８ヶ月、平均６歳３ヶ月。平成25年２月19日採集。

（３）江津市渡津町－市立保育所「渡津保育所」の年長児16名（男児８名、女児８名）。年齢最年少５歳７ヶ月、最年長６歳５ヶ月、平均５歳11ヶ月。平成24年10月19日採集。

３箇所の保育所の地理的な位置は、図１に示す通りである。（１）から（２）までは国道９号線沿いに19.7km離れている。車で26分程度の距離である。（２）から（３）までは国道９号線沿いに16.8km離れている。車で21分程度の距離である。

３）書き起こし文字データ

上記３箇所の発話データは、テープ起こし専門業者「島根ぎじろくセンター」により文字化され、Wordファイルに加工されている。今回の分析では、探索的にこの書き起こし文字データを分析対象としている。各調査対象での文字データ分量（見出し等含む）

図１　調査対象の島根県石見地域の保育所３箇所

（１）大田市長久町発話データ　29,337字（子ども一人当たり文字データ数1,629字）

（２）大田市温泉津町発話データ　23,362字（子ども一人当たり文字データ数2,123字）

（３）江津市渡津町発話データ　22,104字（子ども一人当たり文字データ数1,381字）

対象児人数の最も多かった大田市長久町での発話データが、書き起こし文字数も最も多かったが、子ども一人あたりの書き起こし文字データ数が最も多いのは、人数が少ない大田市温泉津町データであった。

３．結果

１）言語使用の地域差

「出雲方言と石見方言の境界域調査のための予備

調査結果の分析とその方法の検討（１）」（高橋　山下，2013）では、学生への方言使用についての予備調査の結果、表１のような出雲方言と石見方言の違いを見出している。この表では、予備調査のうち、「理由を表す接続助詞の形式」の使用（問１）、「アスペクト形式で進行を表す共通語のテイルに相当するもの」の使用（問２）の結果のみを示している。また、この調査では、学生の使用頻度を「よく使う」３点、「たまに使う」２点、「あまり使わない」１点、「全然使わない」０点の４肢選択で調べており、141名回答における平均値により、言語使用の地域差を見出している。

表１に示す通り、「理由」を示す形式の「～だけん」の平均値２以上（「たまに使う」２点より高い平均値）は、石見東部から出雲・松江・安来・鳥取西部にかけてであり、石見西部では、平均値は「あまり使わない」１点と「ぜんぜん使わない」０点の間の0.5点であった。一方、「～じゃけえ」は、石見西部で2.3点、「～だけえ」は石見東部で2.9点であり、理由を表す「～けえ」は、石見地域で主に使用されることがわかった。石見東部では、理由を表す形式として、「～だけん」と「～けえ」がいずれも２点以上で使用され、混在している。「～だから」は、石見東部から出雲・松江・安来・鳥取西部にかけて１点以上であった。

「進行」を表す形式としては、「～しとる」が、石見西部から鳥取西部まで、広く使われており、山陰の共通する方言であることがわかる。「～しちょる」「～しちょう」が、出雲・松江、安来・鳥取西部で１点以上となっているが、現在の学生の使用状況では「あまり使わない」をやや超える程度である。逆に「～しよる」が、石見西部・石見東部で１点以上で、「あまり使用しない」をやや超える状況であった。「～してる」は、石見東部から出雲・松江・安来・鳥取西部にかけて１点以上であった。

以上の結果から、18歳～ 20歳年齢の学生の方言使用では、「理由」を示す形式の石見東部での形式の混在が明確にあった。これと同じ使用傾向が、保育所年長児にも出現するかどうか、今回の調査で確認を行った。また、「進行」を表す形式では、「～しとる」が石見西部から鳥取西部まで広く使用されていることも明確であり、この使用傾向についても確認を行った。学生調査では、「～しとる」「～しよる」の選択回答であったが、保育所年長児データは自発発話であったため、「進行」とは限らない「結果継続」を含めて、形式を「進行・結果継続」形式とした。

結果は表２に示す通りであり、３箇所の保育所年長児発話データにおける特定形式の出現を頻度で求

表１．学生への予備調査（注）における特定形式の出現得点

（網掛けは２点以上の得点を示す）

	石見西部	石見東部	出雲・松江	安来・鳥取西部
「理由」を示す形式				
～だけん	0.5	2.6	2.4	2.7
～じゃけえ	2.3	0.4	0.2	0.1
～だけえ	1.0	2.9	0.8	0.6
～やけん	0.0	0.2	0.3	0.2
～だから	0.3	1.8	1.6	1.6
「進行」を示す形式				
～しちょる	0.5	0.9	1.3	1.0
～しちょう	0.5	0.9	1.5	0.9
～しよる	1.0	1.3	0.6	0.4
～しとる	3.0	3.0	2.6	2.6
～しとう	0.0	0.3	0.5	0.4
～してる	0.3	1.7	1.6	1.6

（注）「出雲方言と石見方言の境界域調査」のための予備調査結果の分析とその方法の検討（1）」（高橋　山下，2013）表２の引用（一部改変）。141名学生における、「よく使う」３点、「たまに使う」２点、「あまり使わない」１点、「全然使わない」０点の平均値を示す。

表２．保育所年長児の発話データにおける特定形式の出現頻度

（網掛けは５以上の頻度を示す）

地域／発話	江津市渡津町	大田市温泉津町	大田市長久町
「理由」を示す形式			
～だけん	1	2	5
～けん	0	7	13
～じゃけえ	0	0	0
～だけえ	5	0	0
～けえ	15	1	0
～やけん	0	0	0
～だから	17	8	2
「進行・結果継続」を示す形式			
～ちょる	2	0	0
～ちょう	0	0	0
～よる	1	0	0
～とる	43	20	34
～どる	8	3	2
～とう	1	0	0
～してる	9	19	4

めたところ、「～だけん」が５回以上出現したのは大田市長久町データであり、「～だけん」を除く「～けん」が５回以上出現したのは、大田市温泉津町データと大田市長久町データであった。これらは、上記の石見東部から出雲・松江・安来・鳥取西部にかけての言語使用の特徴を、大田市長久町と大田市温泉津町の保育所年長児が受け継いでいることを示している。

一方、「～じゃけえ」は出現せず、「～だけえ」が江津市渡津町データで５回以上出現した。「～だけえ」を除く「～けえ」は、江津市渡津町データで15回以上出現しているが、大田市温泉津町データでは１回、大田市長久町データでは０回であった。大田市温泉津町データでは、「～だけん」「～けえ」が両方出現していた。これらの結果から、江津市渡津町データが、上記の石見東部の言語使用の特徴を示しており、江津市渡津町保育所年長児が石見東部の言語使用を受け継いでいることがわかった。また、学生調査では、石見東部で「～だけん」と「～けえ」が混在していたが、大田市温泉津町と江津市渡津町の間で、出雲方言特徴「～だけん」と、石見方言特徴「～だけえ」の使用がわかれていることが示された。今回は、江津市以西の石見地域は調査していないが、石見西部に相当する地域の保育所年長児からは、「～じゃけえ」を採集することができるものと予測される。

「進行･結果継続」を表す形式としての「～とる」は、表２に示す通り、江津市渡津町データから大田市長久町データまで、頻出していた。この方言使用の特徴も、学生調査の結果と一致しており、保育所年長児と学生の年齢差を超えて、方言使用の特徴が共通していることが示された。今回の調査結果では、「～どる」と発音が濁る表現も出現しており、この頻度は江津市渡津町データ８回、大田市温泉津町データ３回、大田市長久町データ２回であった。

以上の言語使用の実際の発話データ事例は、以下の通りであった。

【理由を表す形式「～だけん」「～けん」】の事例

・大田市長久町データ

○これがね、重くてね、せり上げてね、船がちょっと何かいがんだけん、こうばきんってなった。あとはね、これはね、ちょっとね、ここでここに船でこっち、ばあって落ちたけん、このこいつらがこうやって、ばたっ。（いがんだ＝歪んだ）

○だけん、泣いた。

○だけん、入院された。

○僕、手術したけんな。

○バスに乗るのがおくれたけん。

○こうやって、後ろ向いて走っとったけん、こけて、それで何かお母さんが走っていった。

○この人がこう横に、人間重たいけど、こう横にやったけん、ばしゃんって。

○違うよ、怖がってるけんだよ。

・大田市温泉津町データ

○でも子供３人だけん、力要るで、結構。

○でもさあ、犬がさ、ぺろっとやっとるけんさ、食べられたとか。

○舌なめずりしとるけん。おいしそうってこと。

○井田にいるけん、あんまり乗ったことはないか。

○大きいけん、運べない。

・江津市渡津町データ

○だけん今、僕は死んでる。○僕は小児科だ。○何、それ。

【理由を示す形式「～だけえ」「～けえ」】の事例

・大田市温泉津町データ

○大きいけん、運べない。○大きいけえ、運べない。

・江津市渡津町データ

○ああ、わかった。お魚釣っとるときに、穴がぽんとあいたから、だから、ん。この人がこっち向いとるけえさ。

○ここでね、何かにぶつかったけえ、すげえあざができたの。

○だけえ、泣いとるんかな。

○ぶつかったけえ。

○怖いけえ隠れとるだけだよ、木のところで。

○でも、砂は痛くないけえ大丈夫だよ。

○あれね、男が全部食べたけえね。

【進行・結果継続を表す形式「～とる」】の事例

・大田市長久町データ

○この人、ちょっと来てって言っとる。

○この人はね、どう言っとるかわかった。あのね。

○えっ、怖いから震えとる。

○味見しとる

○揺れとるんで。

・大田市温泉津町データ

○あっ、これ縄跳びで引っ張っとる。

○うわ、配達しとるし。

○向こうでのぞいとる。

○あのね、お握りつくっとるのね、見てね……

○ここのはひもが少ないけど、こっちの方が多くなっとる。

・江津市渡津町データ

○乗ろうとしとる。

○跡がついとる。

○ほら、見て、縄跳びしとるじゃん。

○それで、魚だけ助かっとる。

○ほら、ちかちか光っとる。

【進行・結果継続を表す形式「どる」】の事例

・江津市渡津町データ

○遊んどる。

○僕から見るとね、何か先生呼んどるみたい、全員。

○まあボールもつかんどるけど。

○だって、飛んどるじゃん。

○違う。僕ね、お母さんが休みのときのね、ええとね、お仕事のときね、おばあちゃんちでね、休んどるよ。

・大田市温泉津町データ

○あっ、ガラスとかが飛んどる。

○電車乗ってね、温泉津っていう、おじいちゃんと、今住んどるね、おじいちゃんとおばあちゃんのところに前行ったことがある、電車乗って。

○ひもで運んどる。

・大田市長久町データ

○船と遊んでて、魚釣りしとって、あと、これはおぼれて、助けを呼んどる。

○沈んどる。

以上の言語使用の特徴から、保育所年長児の方言使用が、ほぼ学生の予備調査の結果から予測されるとおりであったことが示された。特に、理由を示す形式の「～だけん」「～けん」が大田市長久町と大田市温泉津町に見られ、「～だけえ」「～けえ」が大田市温泉津町と江津市渡津町に見られたことから、大田市と江津市の境界周辺に、出雲方言と石見東部方言の境界域に相当する言語使用の溝があるものと推測される。これらの特徴は、既存研究と昔話の採話資料から、「出雲方言と石見方言の境界域調査のための予備調査結果の分析とその方法の検討（１）」（高橋　山下，2013）で予測されたとおりであり、20km未満の距離で隣接する地域でありながら、保育所年長児の言語獲得に各地域の方言の継承があり、共通語使用による方言の消失がないことが示された。

現代の保育所年長児の言語生活において、絵本・テレビ・DVDといったメディアから獲得する共通語の役割は大きいと思われるが、子どもの使用する言語において、地域差がこれほどの近距離で見られることは、興味深い。言語習得の要因として直接的に接触する人間関係での社会的学習（模倣）の影響がどれほど大きいかを示しており、大田市温泉津町から江津市渡津町までの16.8km圏内での子どもの言語使用の地域差について、保護者の言語使用、保育所内での言語使用等とのかかわりを含めた、より生態学的な研究を進める必要があると思われる。

一方、「出雲方言と石見方言の境界域調査のための予備調査結果の分析とその方法の検討（２）」（山下　高橋，2013）で、我々は既存研究のまとめから、子どもの共通語使用が、ごっこ遊びでの「セリフ」、授業での「発表」など、話し言葉から書き言葉への移行場面で出現する可能性を示した。次に、このような切り替えを探索的に検討する。

２）共通語への切り替え

第一報「石見地域の幼児の言語についての調査（１）」（高橋・山下，2014）の江津市渡津町データ発話分析において、保育所年長児の方言形式と共通語使用の切り替え（スイッチング）が、誰に対しての発話か（調査者に対してか、その他の子どもに対してか）、何についての発話か（調査対象についてか、自分についてか）といった、対人関係で生起しているわけではないことが示されている。また、「注」において、「敬語形は、デス・マス形のみで、最初に自分の名前を言うところ以外では、ほとんど出てこなかった。それ以外は、決まり文句的な表現で、デス・マスが数回出現しただけである。」と、定型の「セリフ」のような場面で、わずかに敬語形への切り替えが生起していることを指摘している。この第二報では、どのようなデス・マス形がどのような場面で出現したかを、抜粋して検討した。特に、「出雲方言と石見方言の境界域調査のための予備調査結果の分析とその方法の検討（２）」（山下　高橋，2013）で示した、ごっこ遊びでの「セリフ」での切り替え、調査者の質問に回答する、「発表」に相当すると思われる切り替え、「その他」の切り替えの、３分類で検討を行った。次の書き起こしにおける●Ｑは、調査者の発話を示している。

【「セリフ」場面でのデス・マスへの切り替え】

・大田市温泉津町データ

●Ｑ　警察の人、何て言ってるの。○ここは禁止ですって言ってる。

○ホテルに行ったらね、あのね、包帯の下どうなってるんですかって、ホテルのね、女主人が言ってね、でね、包帯の下見たら穴あいとってね、それ、透明人間だったんで。

●Ｑ　警察。この人何してるの。○これはパトカー。○ここは上がれないですよってやってる。

○ガラスとかが飛んでるから、こっち行ったりしたらガラス踏んでけがしますよって、行ったらだめですよって。

○で、警察さんが、ここはだめですよとか言ってる。

●Ｑ　うん、何て言ってる、先生。○こうやっとるから、早……。○早く早く。●Ｑ　早く早くって言ってるの。○おはようございますとか。

○あのね、お母さんにね、おはようございますとか言って、それで、けがしてるよって

【「発表」場面でのデス・マスへの切り替え】

・大田市長久町データ

●Ｑ　じゃあね、お名前を教えてください。はい、お名前教えて。○（名前）○（名前）です。
（名乗りの後のデスは、頻出する。この後省略）。

○はい、僕です。●Ｑ　遠足のとき、乗った。○じゃあ、僕です。

●Ｑ　こうやってるの。○コアラです。

●Ｑ　次の問題、（名前）君、最初から全部お話ししてごらん。今、（名前）ちゃんが言ったの上手でした。はい、（名前）君、どうぞ。○ここ、読みますよ。

●Ｑ　ああ、そう。そしたら、みんな、保育所でこの話聞いたことありますか。○ううん。○聞いたことあります。

●Ｑ　はい、順番に教えてください、どうぞ。○ケーキを見つけて運ぼうとしていますよ。

・江津市渡津町データ

●Ｑ　ああ、そう。熱が出たのかな。○2回目はね、みんな知っとうと思うけどね。○僕わかんないんです。

●Ｑ　いすですね。みんな知ってるね、よくね。じゃあね。○知ってます。全部知ってます。

●Ｑ　そう。保育所休んだことある。○ある。○あります。

●Ｑ　乗る。どこに行った。○ネーチャーゲーム。○ここ江津だっけ。○渡津ですよ。●Ｑ　渡津。

【その他の場面でのデス・マスへの切り替え】

・大田市長久町データ

●Ｑ　って言ってるの、ああ、そうか。はい、それじゃあ、もう一つ聞きます。○ねえ、ねえ、僕、やってないんですけど。

○さっき言ってないんですけど。

・大田市温泉津町データ

●Q　こんにちは。はい、どうも。じゃあね、ここ並んでね、お話を聞かせてください。○何の用ですか。

・江津市渡津町データ

○お願いします。●Q　こんにちは。はい、ここ座ってください。

●Q　そうか、そうか。はい、そうしたらね、紙芝居をちょっとつくってください、皆さんでね、お話をつくってね。いいですか。○いいですよ。

●Q　怖い怖いね。怖いね。○怖くないんですけど。

●Q　怖いね。お化けだね。○そう、怖くないんですけ

●Q　そうですか。○うん。○怖い。○怖くないんですけど。

以上の３分類は、デス・マス形発言のうち名乗りを省略した発話の全てであり、全発話数においてデス・マス形出現はきわめて少ないといえる。

「セリフ」場面でのデス・マス形への切り替えは、図版の登場人物のセリフを想像して発言する内容であり、「心の理論」でいう他者の心理の認知を示している。図版の情景を読み取り、登場人物の関係、役割に応じた発言内容の設定が可能であることを示しており、他視点取得の可能な段階での発言を示している。自己の社会的発話の中に、他者の発話を埋め込む形での発言であるが、その他者が図版では警察官や幼稚園の先生、親などの成人であり、成人の立場で、役割に応じた発言を埋め込む際に、デス・マス形への切り替えが起きていると考えられる。

調査者の質問に回答する形で出現している「発表」場面でのデス・マス形は、デス・マス形で質問する調査者に対して、授業に似た場面の読み取りを行った一部の対象児が、同じようにデス・マス形で返答していると思われる。名乗り場面の「（名前）です。」は頻出するため全部を記載していないが、４人程度の各グループの最初の場面で、調査者が「お名前を教えてください」と質問を開始しており、この場面ではほとんどの対象児がデス・マス形で回答した。ほとんどの子どもは、その後日常的な発話に戻ったが、一部の保育所年長児が、調査場面にふさわしい回答者の役割発言に気付き、デス・マス形への切り替えを行ったと思われる。このような「発表」スタイルは、小学校以上の学校教育などの公式場面での発言に受け継がれるものであり、茂呂（2001）が示した、山形県庄内地方の小学校授業での「発表」場面での方言から共通語レジスターに移行と重なっている。今回の調査対象の一部の保育所年長児において、岡本（1982）が示した、児童期以降の標準語使用「二次的ことば」が、すでにスタートしていることを示していると思われる。

３分類の最後の「その他」は、調査者の質問への回答とは思われない発話でのデス・マス形、であった。「僕、やってないんですけど。」「さっき言ってないんですけど。」は別々の子どもの発言であるが、質問に対する回答という「発表」場面のスタイルを維持するために、自分の役割を指示する発言をしたと思われる。その際、デス・マス形で質問する調査者への指示を同じデス・マス形で表現した可能性がある。「何の用ですか。」「いいですよ。」も調査者の発話スタイルに合わせていると思われる。調査者が「怖い怖いね。」と親しく問いかけ際に、「うん。」「怖い。」と答えた子どもがいる一方で、「怖くないんですけど」と答えた子どももいた。一部の子どもが、調査場面に合わせて、回答以外の発言までデス・マス形へ切り替えた可能性があり、このような保育所年長児の社会的適応性が、方言形式の発言を共通語に切り替えていく根源となると思われる。

「出雲方言と石見方言の境界域調査のための予備調査結果の分析とその方法の検討（２）」（山下　高橋，2013）で示したとおり、Holwegen＆Holwegen（2010）は、追跡研究で小学校第１学年から第４学年にかけて方言使用量が減少すると報告しており、今回の調査で一部の子どもに出現したデス・マス形への切り替えが、学齢期にはほとんどの子どもに出現して、この後、方言使用が公的な場面で抑制されていくものと思われる。今回の調査では、その少し手前の発達段階で、石見地域３箇所の方言の形式の違いが検出できた。今回の調査対象の発話は、地域社会の中で直接的人間関係で社会的学習（模倣）により言語獲得をする段階での方言使用の段階であっ

たことを示しており、また同時に、公共の場での役割発言としてのデス・マス形使用段階への、移行期であったと考えられる。

今後は、子どもの言語使用の地域差に加えて、共通語の習得課程での方言使用と共通語の切り替えの個人差についても、保護者の言語使用、保育所内での言語使用等とのかかわりを含めた、より生態学的な研究を進める必要があると思われる。

謝辞

本調査研究にあたり、大田市サンチャイルド長久さわらび園、大田市立温泉津保育所、江津市立渡津保育所に、ご協力を得ました。職員の皆様のご助力に感謝します。

引用文献

高橋純・山下由紀恵（2013）「「出雲方言と石見方言の境界域調査のための予備調査結果の分析とその方法の検討（１）」『島根県立大学短期大学部松江キャンパス研究紀要』Vol.51. 63-71.

山下由紀恵・高橋純（2013）「「出雲方言と石見方言の境界域調査のための予備調査結果の分析とその方法の検討（２）」『島根県立大学短期大学部松江キャンパス研究紀要』Vol.51. 73-76.

高橋純・山下由紀恵（2014）「石見地域の幼児の言語についての調査（1）」『島根県立大学短期大学部松江キャンパス研究紀要』Vol.52. .

岡本夏木（1982）子どもとことば　岩波書店

Hofwegen J.& .Hofwegen W.(2010) Coming of age in African American English: A longitudinal study. Journal of Sociolinguistics Vol.14 No.4 427-455

茂呂雄二（2001）　方言―共通語音声の違いに関する幼児のメタ認知の獲得過程からみた言語発達プロセス　平成11年度12年後科学研究費補助金（基盤研究Ｃ）研究成果報告書

（受稿 平成25年11月29日，受理 平成25年12月12日）